



留萌の波濤

自然のエネルギーが猛威を
振るう世界3大波濤のひとつ

留萌沿岸に押し寄せる波濤はインドの「マドラス」、スコットランドの「ウィック」と並ぶ世界3大波濤に数えられています。特に、秋から冬に掛けての激しい波は、強い季節風が西風となって日本海を渡り、そのエネルギーが波となって沿岸部に押し寄せるため、冬の留萌は北西方向の卓越した季節風と、それによる風雪、波浪という厳しい気象条件下に置かれています。

留萌開発建設部のデータによると、過去最大の波濤は大正9年(1920年)10月8日に観測されたもので、最大波高7.6m、最大波長106m、最大風速毎秒50mを記録。当時、建設中だった留萌港の南防波堤が被災するほどの規模で、重さ2000tもあるコンクリートケーソン2函が破壊、5函が移動するという被害に遭いました。港内で波高を観測するようになってからは、昭和59年(1984年)10月の波高12.07mが最大とされ、ビルのおよそ4階分に相当する波の高さは想像を絶する凄まじさです。

この波濤や台風の影響で、昭和30年頃までは港の構造物の多くが被害に遭い、港湾関係者は波濤との闘いを余儀なくされてきました。留萌港は道北の物流拠点港として重要な役割を担っていることから、昭和34年(1959年)には国内で初めて、25tの大型波消ブロックが採用され、現在の留萌港の防波堤には世界最大級とされる80t型の波消ブロックが投入されています。激浪に立ち向かい、復旧工事を繰り返してきた先人たちの苦勞の甲斐もあり、今では世界3大波濤の印象は改善されつつあるものの、冬の日本海の荒波をひと目見ようと、各地から見物に訪れる人も増えています。

見どころ

留萌市の景勝地「黄金岬」は波濤が出現するスポットとしても知られています。この辺り一体を形作っている岩礁は層雲峡の大函や根室の車石などと同じ種類の石質。この岩礁を打ち砕くほどの波濤が現れると、岩は一瞬にして波に飲み込まれ、迫力満点の光景に包まれます。

ポイント

例年10月から3月の留萌沿岸は1カ月のうち約半分が暴風日となり、特に12月には10mを越す波が押し寄せることもあります。波濤の様子を目の当たりにするには12月以降の冬場が狙い目ですが、くれぐれも海岸には近づかないよう注意してください。

五感で感じる！ 風土資産の魅力

聴 触 味 嗅 知

聴 岩礁を打ち砕くほどの波の音、空を切り裂くような風の音、それが波濤の威力であり、自然が秘めた力と言えます。強風で知られる留萌の町はいつも海風が鳴り響き、時には波濤や地吹雪となって、猛威を振りますが、それこそが留萌の音として生活に溶け込んでいるのです。

触 留萌港の防波堤には、世界でも最大級の80t型のテトラポッドが使用されています。沿岸沿いで波しぶきに触れてみましょう。



80t型テトラポッド

■ 基本情報 (R1.5)

—